

【一般演題4】 第19席

「五蔵の名称の一考察」

東京 小池 盛夫

先の第2回の学会では、三焦を含めた六府の名称が、天体、すなわち日月星辰を表象するものであるという仮説を提示したが、今回は五蔵（肝心脾肺腎）の各名称が何に由来しているのかということについての一見解を提示したいと思う。五蔵の名称はお互いに何の脈絡もなく考え出されたように見えるが、六府の場合にも、見方を変えたら天体に当てはまったように、発想の転換をすると面白いものが見えてくる。五蔵の名称を解く鍵は、心臓にある。すなわち、心という文字は、心臓の象形（金文）である。加えて、六府が天体（陽）であったのだから五蔵は地（陰）、つまり形態（陰）ではないかという類推をするのである。この考えを押し進めるに当たって、五蔵は全て形態をもった現解剖学上の臓器でなければならない（蔵象ではない）。勿論、脾も左脇腹にある脾臓でなければならない。幸いなことに、『靈枢』本蔵第四十七に、脾が脇腹（残念ながら左の記載はない）にある臓器であるという認識のもとに記述された文章があるので〔「脾大なるときは則ち善（苦を改める）く眇（脇腹）に湊りて痛み、疾く行くこと能わず。脾高きときは則ち眇より季脅（浮遊弓肋、特に第11肋骨）に引きて痛む。脾下きときは則ち下、大腸に加う。云々〕、戦国末の呂不韋撰の『呂氏春秋』十二紀の脾（木）、肺（火）、心（土）、肝（金）、腎（水）という五蔵配当〔後漢の許慎撰の『五經異義』四時之祭に記載の古文尚書説に相当するが、古文尚書そのものは、漢代の偽書とされる。『禮記』月令第六、『淮南子』時則訓を参照。〕の五行の方位〔「木は左に居り、金は右に居り、火は前に居り、水は後ろに居り、土は中央に居る。此れ其れ父子之序」前漢、董仲舒撰『春秋繁露』五行之義第四十二。〕への配列〔脾は木で左、肺は火で前、心は土で中央、肝は金で右、腎は水で後〕を俟たなくとも、現解剖学上の脾臓で解釈できるだろう。結論を述べると、心は象形がそのまま文字になったのでよいとして、他の四蔵（肝、脾、肺、腎）の月（肉づき）をはずした、干、卑、市、馭が、それぞれの臓器の解剖的形態をイメージしているのではないか、すなわち、そのイメージに合った文字を他から借りて名称に応用したのではないかと考える。結果として、五蔵の名称は、すべて臓器の形態を表象するものであろうという仮説を提示するものである。